いらつめ發行の趣旨

女子教育の程度及びその性質如何は大に一國の文化に關係すること更に疑ひを容れざる所にして、想ふに一人も異論を唱ふるものなかるべし。蓋女子の教育と一國の開化とは互に相影響するものにして、文化の進みたる社會にあらざれば完全なる女子の教育を望むべからず、女子の教育宜しきを得るにあらざれば眞正なる開化を望むべからず。女子は人の母たり、人の師たり、自己の性質を生兒に與へ家庭の教育を兒童に授くるものなれば、女子教育は一國文化に影響することもとより論ずるを待たざるなり

これを以て歐州諸國、就中英國にては十八世紀の末にあたりてマリーウォンスソクロフト女史が婦人論を著してより、ハンナ、モアー女史がシーレップスの妻索しを著してより、シドニースミス氏が婦人論を著してより、婦人の教育は漸次に人の注意を惹き、ウォンスソクロフトの著書世に現れたるに當ては世人名けて以て狂人となし、ウォンスソクロフトの名を以て狂人の異名とするに至りたるも、その後百

年の今日に在ては世人皆その奇才を嘆稱するに至れり。二十年以來女子教育の問題は大に人の注意を惹き、大學にしてその門戶を開て女子を容る、ものあり、或は別に學校を設けて女子の教育に從事するものあり、或は高等教育を女子に授くべしと云ひ、或は授くべからずと論じ、若余儕をしてこれらの論文を集めしめば容易に數大冊を充たすを得ん。今日は正に從前女子教育の放棄に對する反動の時期なるを以て、論ずる所爲す所往往極端に失し大に余儕を滿足せしめざるものありと雖、要するに女子教育の緊要を悟りたる一般の時勢を知るに足れり。

顧てわが國の形勢を見れば數百年の間爭亂相踵ぎ德川氏の天下を定むるに至るまでは嘗て一日の平安なく、德川氏亦此天下の勢を受け武を以て國を立てたるが故に、婦人の位置教育は實に憐むべきの有樣に陷れり。抑武を尙ぶ國に在ては女子の位卑しとは天下一般の定則にして、實例を擧げてこれを證せんとせば容易に數枚を充たすを得べしといへども、ここにその要なきを以てこれを擧げず。武を尙ぶの國にして武に堪へざるの婦人を卑むること豈怪むに足ら

んや。加之、當時の教育は少數の階級に偏りて普く人民に及ばざりしと雖その教育中、女子に關するの教は如何なる教なりやと云ふに皆これ孔孟の道にあらざるなし。孔孟の女教には勿論取るべき所多く余儕の熱心賛成するものなきにあらずと雖、要するに孔孟もまた戰國の人なり、孔孟の教もまた戰國の教なりこれを以てその說く所往々女子を卑むるに過ぐるもの多し。世は既に偃武の世なり、教もまた戰國の教なり、女子教育の擧らざりしも豈偶然ならんや。

明治維新の旭日東天に輝きてより万物皆その面目を新め、政事なり、法律なり社會なり、教育なり、一として舊きを棄てゝ新しきに就かざるものなし。こゝに於てか女子教育の問題も大に世人の注意を惹き、新聞に、著書に、論文に正正堂堂としてこれを論じ、政府もまた夙にこの一点に注意し、女子を小學に入れて教育の初歩を授け高等女學校、師範學校を設けて高等の教育を施し女子の教育稍その緒に就けり。蓋女子教育の適切緊要なる未嘗て今日のごときはあらざるべし。今日の日本は孤立の日本にあらざるなり。今日の世界は孤獨生存を爲し得べき世界にあらざるなり。今日の世界は文明に誇り富强に傲るの邦國

肩を並べて並立するの世界なり。今日の日本は此の文明富強の邦國間に周旋して優劣を競はんとするの日本なり。

而してかれは已に一歩を進め、われは已に一歩を退けり。今日わが國の急務は最少の時日に於て最大の進歩を爲すに在り。もしこれにして爲す能はずんば日本は到底西洋諸國と肩を並ぶるの時なきなり。然れども進歩は一世に望む能はず。天保、弘化の人を以て直に西洋人の間に馳騁して一歩をかれに輸することなからしめんとするは恰三尺の童兒をして八尺の丈夫と競走せしめんとするがごとし。熟々現時の日本を見れば天保、安政の人は半老衰死絶して、今より社會に勢力を有せんとするものは、主として、德川氏の末路に生れて明治の教育に服したるものなり。これ等の諸人は或は明治年代に生れ、或は明治の教育を受けたりと雖、その教育の基礎たる性質の遺傳及び家庭の教育に至りては悉天保弘化の人に受けたるにあらざるなし。故に日本の爲余儕の最望を屬するものはこれ等の人にあらずして、猶一代を歴生れて明治の空氣を吸ひ、明治の遺傳を有し、明治の家庭教育明治の高等教育を受くるの人なり。而して是等諸

人の家庭教育を負擔するものは誰ぞや、今より自育に從事するの妙齡淑女なり余輩豈故なくして女子教育最今日に必要なりと謂はんや然らばすなはち妙齡淑女の教育は果して如何なる方向に嚮て進むべきか。

この疑問を解かんとせば先社會に於て婦人の地位は如何なるべきか、如何なる業は婦人の從事すべきものなるかを決すること必要なり。この答を得ずしてまづ女子教育の方向を定めんとするは猶的なくして鐵砲を放ち羅針盤なくして大洋を航せんとするがごとし。婦人の位置に關しては百年來往々世人の注意を惹き、二三の學者の頭腦を苦めたる一の大誤謬あり。かの所謂男女同權論是なり。抑男女同權の說たる男女の性質を顧みず、分業の大利を知らず、琴瑟和樂の美風を忘却したる一の淺見なる議論に過ぎずして、只往時女子を卑めし弊風に對したる一時の反動と見做して後始めてその理を解すべきものなるを不幸にして西洋文明の輸入と共にわが國に流れ込み往々これを唱ふるものなしとせず。男女同權の說は實に社會の幸福を害するものなり、社會の圓滑を妨ぐるものなり。婦人の位置を高うせんと欲して却て婦人の愛すべき性質を

傷くるものなり。それ男女一体は天の道なり婦夫共楽は自然の理なり。男女一体にして而して社會を成し、夫婦楽を共にして一家を成す。かれにあらずんば社會の圓滑望む可からず、これにあらずんば一家の幸福求むべからず。男女夫妻の間豈輕重を爭ふべけんや。蓋女子の性質より見るも、社會の便益より見るも、温雅優容の美徳を以て、柔和親切の良性を以て、社會の交際を滑かにし、男女の幸福を增進するは女子の務なり。家庭の教育を兒童に與へて英雄豪傑たるの基を置くは女子の責なり。一家と齊へ家政を調理し、男女をして力を外に專にするを得せしむるは女子の職なり。これ余儕が認めて女子職分の主要なるものと爲す所なりと雖、余儕は次号に於て婦人の位置を論ずるにあたり、男女同權説の非なる所以婦人の地位は如何なるべきか及びその理如何を論せんと欲するを以てこゝにこれを詳述せず。假りに女子の職分は右に説く所のごとしとせば現今女子教育の有樣は果して女子をしてこの重任に堪へしむるものなりや如何。

悲いかな余儕を以てこれを見れば猶いまだしと答へざるを得ず。下流の女

予は措て問はず上流の婦人は皆能く温柔の德を以て剛强の性を補ふを得るか優美の擧動を以て踈暴の行を制するを得るか、已に接するの人、已と語るの男子をして恰「ラファエール」の畫を見たるが如く、「ベートーベン」の樂を聽きたるが如く洋々として幸福和樂を感ぜしむると得るか。余儕は頗これを疑ふなり。世間の婦人にして幼兒に適切緊要なる家庭敎育を施し得さるもの果して寡きか、患者を取扱ふの法、食物の料理の方法、衞生の注意等これを知らさるもの果して多からさるか、これを行ふ能はさるもの果して稀なるか。余儕は大にその然らさると恐るるなり。これ等の問に對するの答は各人の腦裏に存する所にして敢て余儕の多言を要せさる可し。

然らは則これを改良するの法如何。悉西洋の風習を輸入せんか、西洋の風習いまだ必しも皆美ならさるなり。悉日本の舊慣を廢せんか日本の舊慣いまだ必しも皆陋ならさるなり。然るに世に一種の人あり、政治法律、習慣、衣食住一切皆西洋に摸倣せんことを務め、その美惡に至ては深くこれを問はず、甚しきは假令社會に有害なるものと雖、これ亦西洋の風習を輸入するの一方便なればその

害物を輸入すべしと云ふに至れり。かのヘーゲル氏の所謂「暗夜の群牛色皆黒き」ものにして、苟も西洋とさへ云へば何事にても皆高尚の道理あるが如く考へ日本とし云へは十把一束野蠻の遺風と爲し、西洋の二字を聞けば恰サイレンの音樂を聽きたるがごとく茫然としてその身の禽獸に化せらるゝを知らざるは此の種の論者の常体なり。あゝ西洋の風習は果して皆美なるか、日本の風習は果して皆固陋なるか。

抑西洋の風習は概その源を封建時代に發したるものにして、その后時の進むに從て變更せしもの多かるべしと雖、その風習を守るはその便益たるを以てあらす、その道理あるが爲にもあらず、只時に習慣なるの故を以てこれを守るもの多し。素より風習の起るは起るべき道理ありて起るもと論を待たすと雖、封建時代に必要なるもの必しも今日に必要ならざるが故に歐州の習慣にして今日は全くその理なきもの豈少しと云べけんや。日本の習慣とても皆起るべきの理ありて起りたるものなるが故に時勢の變遷に由て今日に適せざるもの少からざるべしと雖、現時の形勢に適切なる良風美俗豈多からずとせんや。假令西

洋の風習にして現時西洋の有様に適するものと雖、これを以て直に日本の社會に適用せんとせば方栓を以て圓孔を塞がんとするの誹を免れざるべし。これ人の皆知る所、屢云ふ所なりと雖、事の實際に當ては往往この注意を忘却するもの少からず眞に嘆ずべきなり。假令西洋現時の情態に適したる風習にして亦能く日本の情態に適したるものと雖、遽にこれを入れて舊來の習慣と鬪ひ、社會に軋轢を生せしむるが如きは社會改良を誤るものの決して爲すべからざる事なり。改良は宜しく改良なるべし、顚覆なるべからず宜しく漸次なるべし、急激なる可からず。「天は眞空を嫌ふ」とは理學のまだ開けざりし往古の謬説なりと雖、余儕も亦將に言はんとす社會は眞空を嫌ふと。凡反對の元素が社會に峙立してこれを調和すべき元素がその間に存するなきときは社會の安寧秩序を害する事歴史の着着余儕に證する所なり。風俗、習慣のごときは素より直接にかくの如き大害を社會に與ふるの恐なかるべしと雖、反對の習慣相並立して互に相讓らざるときは自ら社會の圓滑を害するとまた勢の止む能はざる所なり。かくのごとく外國の風習を輸入せんとするに當ては能くその美惡を考へ、たと

へ美なりとするもなほわが國に適するや否やを撿し、これを輸入するには須らく漸次にし、且多少舊來の習慣を折衷すること風俗の改良の爲最望ましきこととす。然れども反働の勢力は實に恐るべきものにして、世の婦女子にして間間溫柔を以て卑屈となし、倨傲を誤て活潑と信じ、日本固有の美德を擯斥し、かの愛すべく尊むべき性質を放却し甚しきは貞烈の最大德をさへ失ひたる者なしとせず。かくの如きは素より少數の婦女子にして、且その行は夙に淑女の余儕と共に擯斥する所なるが故に今喋喋これを論ずるを要せずと雖、將來望あるの妙齡女子にして或はその方向を誤る者あるを見れば亦全く越人の肥瘠視する能はざるなり。

以上陳述するが如く、余儕は女子教育の必要を感じたる世界の大勢を知るものなり、余儕は女子教育の時に今日わが國に必要なるを感ずるものなり、余儕は婦人の位地に付きて持論を有するものなり、余儕は現時日本婦人の情態を以てその重大なる地位を充たすに足らずとし、その情態を改良するに付き大に方案を有するものなり。爰に於てか余儕は微力を顧みず本紙を發行して、婦人に關

し改良すべき点を示し、その改良の方法を論じ、日本の美風を存し西洋の良俗を取て以て日本婦人の位置教育を進むるの業に従事せんとするに至れり。

本紙の目的とする所は主として妙齢の淑女に在りと雖、已に一家を調理するの責に當るの貴婦人にもまた本紙を覧て多少の利益あらんこと社員の深く希望する所なり。本紙記する所分て家政、姫鑑、雑録等の数欄となす。家政の講義を掲ぐるは婦人の職一家を調理するに在りと考ふればなり、姫鑑を載するは本紙の主義婦人の令徳を進歩するにあればなり。その他雑録には美術に関する事項を掲けて思想の品格を養ひ、又交際の心得を載せて交際を滑にするの務を助く。時時の要報は月報にこれを載せ、なほ評論すべきは社説にこれを論ぜんとす。

謹て女子教育に熱心の貴紳諸君に告ぐ、本紙の趣旨かくのごとし。仰ぎ願はくは本紙の主義にして賛くべきはこれを賛けられよ、駁すべきはこれを駁せられよ。力を協せ心を同うして婦人の位地教育を進めんと余輩の深く希望する所なり。伏して淑女諸君に白す。諸君は本紙の問題に直接の関係を有せらるの

諸君なれば本紙の趣旨を贊成し、余輩の力を助け、余輩をして圖に尽すの一端を成すを得せしめ給はば何の幸かこれにしかん。

○女學生の會談。高等師範學校女子部にては、生徒一同申合せ、教育に從事するものは、將來必衆人に向て說話するの要あるを以て、これを練習するため、又兼ては見聞を博むる爲に、毎月第二、四の土曜日には午後六時より一同相會し、預め定め置きたる順序を以て生徒方互に談話をなしー次ぎに、當夜臨席せる講師にその批評を乞ひ、后講師の談話等もあり、又開會中には幹事(尤生徒)の意によりて、生徒一同の唱歌を催すことあり、また他の新趣向にて興を添ふることなどあるよし。

○女學生の体操服。高等師範學校女子部の學生方は体操の時には、体操服を用ひらるるよし、尤その服は單衣地の樣なるものにて、學生方各自仕立られしものなりと云ふ。

○京都通信　去年四月以來女生徒の束髪及び袴往々見ゆはじめ、當時これを奇異とするもの少からざりしが、この頃にては日日その増加するを見るのみならず、工商の細君にも往往束髪を見るに至れり。
また婦人唱歌會、婦人教育談會等あり、或は京都教育會に加入する婦人も隨分多く、その他大に婦人會同を喜ぶの勢を生ぜり。然るにこれが爲長少婦人の間に往往軋轢を見るが如し。長者は大抵温良にして學問乏しく、少者は高等教育を受けたるも風采おしなべてあらあらしきが、近ごろは少者の風漸く改るが如し。

○婦人洋服の害　近ごろ婦人洋服の流行するは至極よき事なるが、元來婦人洋服を裝ふにはコーセット(銅鉄又はクジラにて製せし腹帶)を以てギウと腹をしめつけて恰好を繕ふ故、他出中食時にあふも食物は腹に下りがたければ、歸宅の後コーセットを解き初めて食事をなすこと毎毎なりと。これ等は体育上弊害少からざれば世間の洋服を用ふる婦人方は注意ありたき者なり。

(六月四日教育報知抄出)

風琴調一節　　　　美妙齋主人著

緒言　言文一致は文明の註標と或る人も言つた通り是ほど宜い事は無いと言ふ處から近頃に至つては我國の文に關し些しは焦慮する人も出て來たは實に忝い事だ。然しながら、何を言ふにも習慣といふ大敵が有るので一旦新奇の俗体に改めると、ヤレ語氣が卑いのヤレ風韻に乏いのと變に皮相に惑溺した人が喧ましく言つて出て來る。それ故に躊躇していまだに俗体の規律を穿ち、それを專用した者もなし。殊に世話物の小說に至つては其詞のみ卒うして俗体になッて居るもの丶、その地は矢張り雅文体の「ナリ」「ケリ」「ベシ」などを用ゐ地と詞とをして抵牾させるとは實に見苦しい事だ。何しても之をば改めなくてはならぬ。が、それが容易で無い。容易で無い故言文一致は迚も日本の今日に望む事は出來ないと筆を投げた人もある。それもまた氣が短い。なるほど雅文体には俗文体の及ばない

樣な處も有るが、また俗文体だとて鹽梅さへ巧に爲れば、中々雅文体に劣る所も無く、而も自然に規律も有つて言ふに言はれぬ妙味も有る。此小説の文などをば、稍此邊に注意して書いたもので、一口に言へば圓朝子の人情噺の筆記に修飾を加へた樣なもの。是亦隨分耳馴れぬ風ゆゑ、小言を言ふ人の有るは知れた事。然しながら、小生とて此体を造創めるに於ては可なり苦辛をも爲たもので、まんざら定律を立てぬでもなく、定律に從はぬでも無い。それをば此緒言で言盡くせる者では無い故、此處には全くそれを省いた。たゞその些斗り細かい事は小生が作つた小説贗金剛石の序に在る

第壹曲

「ハテしほらしい調の音色じやな。ト畧さしも妙なる爪音を聞くに付ても身の上を………（闕扉）

此處は江東の中村樓。慈善音樂會開演と筆太に記した招牌をば入口に綴の都其都から取つて來た珊瑚の大球かと思ふ程な球燈を懸列ねてある樣、一目見て田舎者は魂消て死ぬとは支那風の形容。まさかに其程では無いが、先は中々美い。入口で下足を扱ふ男の顔も毎よりは立優つて莞爾に見ゑるは、早最ち

美術の神に感化されて、心に和氣か充ちた故かそれとも御立の半纏と手拭との御蔭か、その邊は分らない。所へ入つて來たは兩人連の娘でいづれも皆例の束髮。おめずおくせずツカ〳〵と階子を昇つて二階へ上ると、早其處に充滿して居る人の目は宛然言合はせた樣に二人の方へムキ身の味噌汁、おつてり粧の少女に似合はず……テモ凄い……會釋もせず、肩で風をば霧島山、高く澄まして頭拔け、きよろ〳〵那方此方見回はしながら程宜い處に座を占めた其舉動の活潑過ぎたに皆均く驚いた。此高く澄まして通拔け、那方此方を見回はすは人が自分を見て居るかと思ふ自惚心から起る事で、此時人が見て居れば故意と顔を背けなから人知れず得意と爲て悦ふもの。世の婦女子で此癖を有たぬ者は極少い。

此少女は二人ともさる女學校の生徒で、最早卒業は來年となつて居る。一人は名を阿角とて此年凡十六七で、顔の道具は極好いが眼と眼との間が些し濶い故惡く言へば凸鏡へ映した顔らしい。但し一寸見た處では全くの無瑕とよりは思はれぬが、それも一つは顔の色が非常に白いからの事。此色が白いは砒石を飲んで白くしたのだといふ説も無いでは無いが、虚か實かはまだ知れない。

併し全く虚說でも有るまいと思はれるは當人が些外見張りで、近頃から頻に歐洲貴女の眞似をば爲したがるゆゑ、幾分か夫等の爲に或は强ひて紅色を皎々たる白玉に變はらせたかも知れない。

今一人は年頃凡十八九、圓規を掛たらば、耳ばかりが殘るであらうと思ふ程な圓顏、それは好いが、笑ふと上齒根を露はすといふ不忠義な口態右から見ても左から見ても迚も美くは見られず唯饒舌らしく思はれるが、實に其鑑定は間違無く生附いた蓮葉の質。それに其名が阿丸とはよく〳〵兩親が名を命けた時、先見の眼力が有つたものと交情の惡い朋友は惡口を伊吹艾、熱くなつて父と母が此阿丸の阿侠を直さうと勉めたが中々驗が無い、切て學問でもよく爲せたらば終には直る事もあらうと其處はそれ親の慈悲此年になるまでも學校へ通學させて置いた處、それが却て當人の毒になつた。懇に洋書の一二冊は覗いたので、贔目の當推量、西洋諸國では女子に威權を取らせるといふ議論も出て來たの、男女同權が我邦に行はれぬが慨はしいのと一口交に理屈張り、父母をさへ下目に見る不孝者と成田の不動、挺でも動かぬ天晴女丈夫、最初は温和の性質であつた阿

角をも眩ませて、生意氣な人間に仕立上者、いぼヒり者で天成の赤毛を人に見せGolden Hair (金髪)と洒落て居る。

扨話說しは前へ戻つて、阿丸阿角の兩人は程宜い處へ座を占めて、開場を待つて居る内にも兎角に例の癖が出て四邊の人をも憚らず女子に似合はぬ疾言で互に高慢を言つて居たが、阿丸は俄に何事か思附いた光景で

(丸)鳥渡モシ那ゥ昨日は御國に御出でなさつた貴娘の御母さんの一年忌とかで昨日貴娘は本所の伯父さんの處へ御出でなさいましたが、また伯父さんが例の因循な Declamrtion (演說)を始めて、貴娘が活潑過ぎて來たとか何とか仰つたでしやう。

と言はれて阿角は笑ながら

(角)エヽ始めました。始めましたが、どうも實に………

と言掛けて何を思つてか、頭を垂れて何となく鬱いた樣な風であつたが、暫刻して息を吐き、

(角)どうも實に妾の腹を抉る樣に………ね………伯父が言ふにはあれ阿角ゥ、よ

く御前も考へて御覽。御前の兩親が假令學問脩業にもせよ、女の子の御前を遙々此東京へ手放して置く其心持は何だらう。雨につけ風につけ、世の風潮が變はるにつけ、御前の身の上をば一方ならず案じて居る。それだのにマア此頃は變に生意氣な女子になり、人の異見も聞ないといふ事が阿母さんの耳に入り、根が神經質ではあるが、サア大變に苦勞をしてそれが爲め去年の今日……ア、己の樣な者でも思出すと……な……な……涙が溢れる……氣病にして死……死……死んだア。それだのに御前はまだ……まだ何故……女子眞正の美德は何の点に在るといふ事を知らないのだ。よもや知らないでもあるまい。知らないでも無くて、左樣爲つたは全く血氣の至りで、其儘で行けば嫁に世話の爲人も無い樣になるとは知らないか。ノウ阿角、慾目かは知らないが、一年々々と大きくなるにつけ、色も大層白くなり、見上げる程な………

と言ひながら流石に不圖心附き慌てゝ、其處を眼で紛らし、

(角)エヘン。吾郞の……エヘン……だから御前も阿母さんの一年忌に當る

今日から心を入替へて、輕忽に流れぬ樣に學問をしておくれ。左樣したらば亡なつた阿母さんも何の位嬉いか知れないし、また殘つて居る親父も嘸く安堵するであらう。チ……賴むからサ……此伯父が……賴むからサ……ノウ阿角。ト一生懸命に……チエ貴娘、誠心を籠めて言ひましてよ。話す內にも四邊の人に聞かれまいと思ふ故忍音の樣で忍音で無い妙な聲調で說示した。けれども元來此阿角はそれ程酷い蓮葉でも無かつたので、その蓮葉となつたは全く此阿丸と交際して、我が志操もまだ堅くない時だから、遂に我知らず歹い方へ薰陶されたのだ。それ故今日は母の一年忌といふ時、伯父に異綿で類を聚める樣よ異見をされたので、何と無く腸に染亙つた。まだ此處が血氣の堅まらぬ證據で、流石に賴もしい處が有る。處が實に朋友の惡るいのは怖ろしいもので、阿角が斯う言ふや否や阿丸はくすくす笑ひ出して、阿角の顏を差覗き、

(丸)マア貴娘とした事が常の御氣象にも似合はない、何の事でしやう……アラ淚含んでサ……ミつともない。何ですチ伯父さんに左樣言はれたつ

てそんな分界らない議論を言はれたつて、氣にする事はありませんヤす。辨駁して御遣んなされば宜いに……否サそれは伯父さんが御無理といふもの。此日進の今日そんな姑息な事どが出來るもんですか、是だからまだ東洋には昔の儘の空氣が殘すて居て困ります……

と長々しい冒頭を置き、抄饒舌出さうとする時、早音樂の執行となり既に高座で搔鳴らす琴の音色が澄亘つて、聽衆の心耳を洗清めて來た。是で話も立消となり、二人均く其方を向き、茫然として聞て居る内、一曲果て、二曲終り、琵琶と代り、尺八となり、終に其大詰に風琴が現はれた、此風琴を彈く人と謡ふ人とはいづれも皆妙齢の婦人であつて、之に伴ふて出て來たは一人の男子で年まだ若い。世界の鑑案では凡二十四五か知らん、綾羅沙で作つた細胴の洋服を殊際美く着下し、ヅボンは流行を旨としてか、是も並よりは細い方ゆゑ、何處となく身体態に味が有る、顔はミルトンの再生と評された位であるから、美麗なるは知れた事だが、些しでも說立てぬと何やら遺憾故、聊摘んで評すれは先形は卵子形で寧婦人めいて居るなど云たくのミルトン、それも顔ばかりでは無い。才も餘程富んで居る

が、殘念な事は一時ある學校で變に束縛されて、大に才思の自由を妨げたとの事で、當人も頻に夫を口惜がつて居る。實に口惜がるも無理で無い。餘人は知らず天成の美術家に自由教育を與へぬは盲目の沙汰だと佛蘭西のある美學家が言つたが、洵に當つて居る。それは兎も角も、此人は元靜岡の産で、高木景遠といふ名である。父には早く別れ、親い人は母親ばかり、始終それに接近して居るので、互に相賴む情が極めて濃くそれが一つは當人に强い感情を持習はせて、幾分か天賦の詩才を富まして來た。但し此景遠が著した書物で、視ると頗る氣概の磊落な處が見えるが、また之とあまり睦ましくない、朋友の說に因れば男子の氣は全く無く、十分に婦人めいて居るといふ評も有明、月も見る人の心に從つて悲くも面白くも見えるもののゆゑ、强ちに此二說の孰が謬つて居るとも言はれない。

扨此景遠が今日此慈善音樂會に出たは此頃作つた唱歌を披露するためで、早既に譜にも叶せた故、斯くの如く謳ふ人をも備つて來た。其處で高座へ出て來てから暫刻兎や角準備を爲し、やがて景遠は進出て、聽衆に會釋を爲、

(景)今日は拙作の新曲を御聽に入れるため、斯く現れて出ましたがそれを謳

ふ前に聊其話の由來と申上げる積りです。それゆへ何か暫時の間訥辯をば御容赦あつて一應御聞き下さる樣に願ひます……

冒頭ながら辯舌の調子取も聞苦く無く、天晴一個の紳士とは見ゑた。聽衆の中には妙齡の令娘も多く居て、もし是等の令娘が人の少ない所で此樣な紳士に遇つたなら多くば隨分恥ぢて最初の程は顏をも擡得ぬものだが、扨妙なもので今斯う人の多い所では別に何とも思ふ風無く、却て妾に眼を注めろと言はぬばかりに差拔けて、皆景遠の顏を瞻詰めて居た。阿丸は無論其通り。所が獨阿角のみは前に伯父の事を話して、其感念が消ゑぬと見ゑ、猶惘いた樣な体で、些し顏を背けてゐた。景遠はまた語を繼ぎ、

(景)是は舊幕の頃の事でしたが、さる邸に仕へて居る二人の兄弟が有りました。兄の名は菊本十二郎、弟の名は十三郎とて、孰れも才子の評高く、家中の評判者でしたが如何なる天魔に魅入られてか、不圖弟の十三郎は今迄の忠義無二の志に引更へ、殿の命を狙つて來ました。堂翁も餘程出來て來ました。然るに此兄弟といふは菊本源之丞といふ家老の子で、其源之丞は先

年病死して、家には一人の母親ばかり居ましたが此母親が中々剛氣な女です。不圖した事より十三郎の謀計を知り大變だと一時は胸を突いたが扨また通常の婦女子の樣には騷ぎません。それと無く遠回しに十三郎に異見ともしたれど、更に悔悟する樣子も無い。悔悟はせぬと見切つた故、苦肉の計を案じて、家を續かせる樣にしました。それは何したと言ふと、兄の十二郎に十三郎を殺させたのです。元來兄の十二郎と薄々は十三郎の謀計を知つて來て「こりや捨置かれない、何しても弟を殺さないでは」……と思つたが流石に母を憚つて居るそれと母が推察して、終に書置を殘して、刄に伏しました。其書置の表に因れば、もし十三郎の謀計を成就させた日には殿と殺すのみならず菊本の家も斷絶する、それでは先祖へ對して濟まない。因て弟の謀計が成就せぬ前に兄が弟を殺してしまへば、殿の身の厄難も去り菊本の家も斷絶せずに濟む。それ故母が居ては事の邪魔になるであらうと思ひ、斯通り自殺をするといふ趣です。是から十二郎は之に勵まされ、千辛万苦して弟の謀計を破りますが今日御覽に入れる處は唯今の母親が自

害する處で些は悲しく聞ゆるかも知れませんが、それは風琴の庇蔭です、歌はあまり好く出來ては居ません。すべて心に訴へるものは仮令巧に出來て居たにもせよ、全く無心で聞いては何の味も有りません。それを聞く人自身が其處に臨んで居る樣な心持になつて聞くので、始めて艶の上にも艶が出て來るもの、……デ……其處に臨んで居る樣な心持にするのは先第一に聲調です。

と辨了つて座に歸ると程無くして調初まる風琴の音は宛然胸に透るばかりまだ何も語らぬ前から何やら悲い音色だと聽衆一同咳もせず、動脉ばかり盛に搏たせて、聞て居るうち謳出した歌はすなはち自害の愁嘆。

第一の歌

エヽ妾はどわぢきない　者が此世に有らうかい。
お仕合だと人さまに　褒められる程比類無い
子供二人と持つてるに　其子の一人が……怖ろしい………
大恩受けた殿樣の　寐首、寐首を搔かうなど

企むとはマア企むとは………
破滅となるは知れた事。

第二の歌

夫では御先祖様たちへ
濟まぬ譯だが、左様かとて
張裂く樣だ、ワアヽヽ。
悲くつても武士の妻。
出すとも宜いに恥かしい。
認めたから最今は………

第三の歌

日頃からして孝行な
妾が自害したならば
悲かろうと知りながら
氣強い親が何處にある。

こりや何しても此家の
對しても亦濟まぬ譯
救ふ便は………エヽ胸が
オヽ我ながら淺はかな、
涙、御前は何故出るよ。
覺悟は極めた、書置も
子ヱ十二郎、御前ゆゑ
嘸悲かろ悲かろ。
斯して死んで行くといふ
十二、斯だよ、影ながら

これ此通り手を合はせ、御前の部屋の方を向き、
詫とば爲るよ、チュ、十二。

此第三の歌に至つて、楽器の音色は昇詰めて悲氣に響いた故、聴衆一同終に感動されて、我知らず袖を絞つて來た。其處で變化を出すために些し音色を緩くして謳初めたのが第四の歌だが、是も中程から悲くして來た。

第四の歌

高い聲では言はれぬが。片輪の子程何とやら、
憎い奴だと思つても纏ての内に現在の
兄に殺されるだらうと思へば不愍で堪らない。
チュ、我子の兄弟に親が、實母が吩附けて
決円をば爲せるとはテモヤ何言ふ因縁で
仇敵同士が生れたか

第五の歌

と……て……て……此手が………殘念な……何してこんなに震へるか。

撚へて突けば咽氣管を　突損じると先生が
仰やつたのは此處の事。　それでは十二、十三郎、
宵に見たのが見納だ、　未練、卑怯な氣を出さず
御家の爲に家のため、　必ともに潔く………

あゝら苦い………なむあみだ。

謳了ると程も無く風琴の音も晴の夜、燈火でも消れた樣に聴衆も茫然となり、首を傾けて泣くばかり、曲が終つてから五六秒はまだ沈として音も無く、漸く五六秒過ぎて、溜息の音が聞れて來たは餘程感じたものと見れる。

是で今日の開演は尾張の名古屋、鯱張つた局長も、鱗に緣ある金満家も、猫も、釋氏も御烟草盆も皆血液を衝動され顔は茜の夕日影殘る中にと銘々に家路を指して狂花櫻色の頬先を押へた儘で起ちもせず、高座を下る景遠を影遠くまで恍惚と外見もせずに見送りながら阿角は我身で我身を忘れ「エー阿母さん赦して」………と言つたばかりで胸もどきく、はつと心注いた体で、我身の四邊と急がはしく見返柳の緣の糸、結ぶはじめと鳴海の千鳥泣かぬ計の面体になつたはそもく

何言ふ譯か、黑か無常か、後悔か、その委しくは此次に………

家政要錄

家政記者が始めて淑女の方々に謂ゆる引手物として、まづ家政とは何樣のことを申すものにや、また何程に大切なるものにや等に付きて、一言申しまゐらせんとす。しかれども家政は果して方々が其實に當らせ給ふへきことなるやの問に付きては、これをこゝに申しのべず何故となればこの問は婦人の地位如何によりて定まるものにして、其地位如何は宜しく社說記者の論ずべきことなればなり。されば、こゝには家政は一家の細君にておはす方々の爲し給ふべき務にして、家政學は將來に於て一家の細君たるべき淑女の豫じめ氣付け置き給ふべきことゝなりと假定して論ずべし。

家政のもと

芳洸生

家政とは一家の世帶向に屬する諸事の取扱を云ふ。世帶の扱方に種々あり、月々兎角に多くの金錢を費し、漸くに一家の生活を爲すも世帶なるべく、一月の

收入は一月の支拂を爲すに足らず、處々よりの借錢にてやうやく勘定を取繕ふも世帶なるべく、兼ては衣服家屋の掃除宜しからず、病者常に絶えざるもまた世帶なるべし。これらとは其趣を異にして、割合に少き金錢にて能く一家を取賄ふも世帶なるべく、飲食の物其宜しきを得て、一族の健康を保つも世帶なるべく、一家を琴瑟和樂の中におくもまたこれ世帶なるべし。去れば今世帶の司となれるものは、出來るだけ金錢の費を省き、成るたけ手數の入らぬやうにして、家族の幸福と家族の健康とを得んと、心がけざるべからず。一家の世帶に於て費す處最も少くして、得る所最とも多からしむる工夫を爲さんには、學問の智識に頼らざるべからず、而してこの工夫を敎ふるものは即ち家政の學なり。

こゝに言葉を更めていはんに、家族の快樂と、家族の健康とを得んには、おれを食物、衣服、家屋等に求めざるべからず、而して食物にへ何物を取り、衣服には何物をゑらび、家屋は何樣の構造ならざるべからざるや等を敎ふるものは家政の學なり。故に食物の種類及び料理方は如何、衣服及び洗濯のことは如何、家屋の構造は如何、家屋の排水は如何、及び家屋の空氣流通は如何、家內什器の處置は如何、

身体の健康を保持する方法、及び病者の看護法は如何、金銭の使用方は如何等は、皆家政學に於て論ずる所の大切なる事柄なり。もし家政の司となれる人人にして、これらの智識なかりせば、日日種種の困難に出遇ふは勿論、人間の生活を支配せる自然の規則をさへ心得ざるが故に、楽しき一家の暮しをなすあたはず、また一家の人人その天禀の壽を全ふせんこと最も覺束なきこととなり。西洋の諺にも一家の繁盛と、一家の快樂とは、共に細君の十指に係ると云へり、されば一家の繁昌と一家の幸福とは全く家政を司れるものゝ扱方如何によれることをいへるものにして、さてこそ細君の一家に於ける容易ならざる關係あることを知るべきなれ。

身体を不潔にすることと及び調理方よろしからざる食物を食ふことと或は空氣の流通あしき家内に居ることなどは、皆身体を害し、終には家族をあげて不幸の海に沈淪せしむるに至ることは人のしる所なれども兎角等閑に附すもの多し理、學化學くなどいへる學問は深くこれを究めたる男子なきにあらずといへども、これと以て衣食住の改良を促さんとせらるゝ人は余り多しとも見ねず况し

てや女子の方方にありては、家政の學に心を委ねて、一家の取扱に苦心せらるることも承りも及ばず。押花彈琴の術に通せざれば、貴婦人たるに於て十分ならずのと云ものあれども、家政の道を心得ざる淑女とは娶るべからずと云ふものあるをきかず。わが國に於て家内の幸福甚少きこと是非もなき次第なり。一家こと既にかくのごとくにして、何とて能く一國一社會の繁榮と幸福を生ずることを得べき。抑國家は廣し、社會は大なりといへども、これ一家と一族の集に外ならざれば、一家一族の幸福健康は直に一國一社會の繁榮に關係せること明なり。國家の强盛といひ社會の幸福といひ、これみな頗むつかしきことにして、そは如何して得らるべきかを知りがたきがごとしと雖、細にこれを察すれば一に婦人の家政の處理如何に歸せざることなし。假へば男子外に奔走して一國の政治に力を盡し、或は殖産工業に從事して一國の富を增さんとするも、一家の取扱その宜しきを得ざれば、男子の業終に成ることなし、これ他なし取扱方の齊はざる各家は、繁榮なる一國を爲すこと能はざればなり。思ふてこゝに至らば、人世の最大切なる事業は、婦人の業務なることをしり給はん。記者は古來歷

史の上に現はれし政事家、學者等の名譽と事業とを記臆せること少きにはあらざれども、その人生の生活に影響を與へしことゝ、かの婦人の業務の社會に於けるがごとく大なりしことをしらず。されば、いま英國の繁昌なる所以を問ふものあらば、記者は、上施政の宜きと、下人民の活潑なるによると答ふるのまゝ、まづ英吉利全國各家内の取扱その宜きを得たるの結果なりと答へざるべからず。或はまたわが國の振はぬ次第を問ふものあらば、記者はわが國の壯年有志の無氣力なるによると答ふるのまゝ、まづ各家内の處理その宜きを得ざるものあればなりと答へざるべからず。

以上述ぶる所のものは皆この現在に付きて申したるにすぎず、希はくは一歩を進めて筆を將來の時代に入ることを許されよ。今より四五十年の後に於て殖産工業に從事してわが國の富盛をはかるべき紳士と、一家の世帶を能く齊へ、男子をして力と外に專にすることを得せしむべき貴婦人とは、皆今代に於て、早晩淑女の膝下に保育を蒙る所の赤兒にあらずや。今數年にしてこれ等の赤兒の保育を一手に引受くべきは實に淑女の方方に在り、方方は如何にしてこの

務をなしとげんとせらるゝや。思ふに育兒のことは人生の最大要務にして、實に女性の方方の擔任し給ふべきことなり、而して一家の取扱既にその宜きを得ざるあれば、幼少と養ふの方行届かざるものあるは、また爭ふべからざることなり。さてもかくばかり大切なる業務を負ひ給へること、これ婦人の方方の名譽にてはおはさずや。さるにかくばかり大切なる務を帶びながら、これを打捨勝にせらるゝこと、これ方方の不名譽にてはおはさずや。

しかれども世間の廣き、世人の多きその中にはこの大切なる業務をなさゝるを以て、啻に己が耻辱と思はざるのみならず、却て爲さゝるを以て名譽なりとするの方方おはするに於ては、嘆きても尙餘りある次第なり。家政の整はざる一家は實に不愉快なる一家にして、破產の流行と、惡疫の蔓延あれば、まづその見舞ふ所はかくの如き家にあり。家內既に愉快ならざれば、家族こゝに親睦せず、獨外に出でゝ快樂を求めんとして、遂には敗德の所業をなすものさへあるに至る。かくの如き一家相集りて焉んぞ能く國家をして富强ならしむることを得んや、家政のことは實に大切なりと云ふべし。

將來に於て家政の責に當らせ給ふべき淑女の方方、以上の申述によりて家政の大切なることを認め給ひなば、今后本紙上ごとにこの欄内に向て多少の意を注がせ給へ。記者もまたかくのごとく大切なる業務を淑女の方方に責めまゐらするからには、自ら勤めて方方に對して、忠義なる相談の友たるの名譽を得んことを希ふになん。

食物を料理する理

食物を料理するの理由は何ぞ。その理凡三あり(一)食物をして能く吾人の身体を養ふに適せしむること(二)その調味を濃ならしむること(三)胃の消化を容易ならしむることこれなり。蓋食物はその種類によりて、なす所の功用もまた同じからず、假令へば脂肪、澱粉、砂糖分を多く含める食物は、身体の熱と勢力を生じ肉類、乳汁、卵、小麥等の食物は筋肉を組織するに適するがごとし。さればその功用によりて種種の食物を宜しき樣に組合するは、食物の料理に於てまづ心掛くべきことにして澱粉を含めるものには卵、乳汁の類を添ふるなど種種の注意を以て完全なる食料を得んことを務ざるべからず。また食物が魚肉たり、野菜た

るに拘らず、その料理方によりて、その趣味の同じからざることは皆人の知る所にして、その料理方によりては全く異れる味さへ付くことあり、或は甘くし、或は淡くし、その味をして能く吾人の賞翫を喚ぶに至らしむるは、一に料理の仕方にあり。まづ食物の料理に於て至極とする所は、同一の品物を以て出來るだけ身体の養ひとなし、同一の食物に出來るだけの快味を付くるにありと知るべし。

料理方宜きを得たる食物は胃臓に消化さるること最容易にして、料理方によりては粘硬き食物をも軟になすべく、肉類の纖維のごときをも破碎するを得べし。或はまた澱粉の小粒を膨脹せしめて、おのづから破碎するに至らしめ、或はまた脂肪性の食物を他の食物と相混和して、その消化を容易くすることを得るなり。今それ消化の作用の始まる處は口にして、佳良なる香味ある食物に接する時は直に唾液を洩は畢竟食物を口に受る準備をなすに外ならず。既に口に達したる食物をば歯を以て咀嚼し、唾液にて浸潤す。即この唾液なるものは澱粉を變じて砂糖の一種となすの功用あるものにして、食物と十分に咀嚼せずして飲下だすはよろしからずと云ふは、唾液のあの作用きを十分ならしめざる

の害わればなり。専つはら澱粉より成れる食物をば小兒に與ふべからざるの理も自ら明なり。小兒の歯を生ずるに至るまでは、その唾液は澱粉を砂糖に變ずること能はず、而してこの變化を經ざる澱粉は能く消化することなし、言葉を換てこれを云へば能く血液中に入りて養分を身体に與ふること能はず。消化せざる食物は身体に何の功用もなさざるのみならず、却て害を加ふることあり即胃臓のごとき消化を司れる機關を傷くるに至るなり。されば食物の料理に於てはそのものをして消化し易からしむる事を、前の二條と共に心掛くべきなり。

今家政を取賄ひ、食物の調理を監督するものに於ては、以上の三箇條さへよく心掛くればそれにて事足れりとなすか。記者は未だしと答へざるべからず何となればその費用を顧ずして、山海の珍味を集めば、或は胃の消化にも容易く兼ては趣味の美なるなきにしもあらざるべしと雖、されど一家の經濟に於て取らざる所なればなり。唯それ家政に於て主眼とする所は、最少の費用と、最少の手數にて、前述の三箇條を滿足する食物を調理するにありと知るべし

記者はまづかく大体の理を述べおき、然して後號を追ひ實際細密の方法に立

ち入らんと欲す。

雜錄

和歌稽古の仕方　第一回

たそ屋のあるじ

和漢の文學に付ては初學を敎へ導く仕方の宜しからざるもの多かる中に、和歌稽古の導き方には隨分感心すべき事もあるなり。まづ歌よみの戒に「初心の時は歌學なくとも、まづなにゝても題を得て俗言俗態のたどりなく口に任せてつらね習ふべし。」と云ひ又「歌に口なれて後の學問なり。」など云へり。ては物よりして道理に進み、事よりして規則に及ぼせと云へる敎育學の心に背かざるがごとし。われ等もかやうにすゝめ申さんと思ふなり。

さて大体の順を右のごとく心得てのち細なる仕方に立ち入るべし。「なににても題を得て」といへるその題をばいかやうに撰ぶべきかの問ひに對しては、これまでの仕方あまり狹くるしく、あれぞと吹擧すべきものなし。歌よみの流義にては大抵立春とか、氷邊柳とか、きまり切たる題につき文字のよみまはし、景物

の取り方を敎へてよまするを常とせり。かくてはよむ人みづから感ずる所なき題も多くいで來て、つまり先生のさし圖なる景物とか、またはし方の中にさまよひて同じやうなる趣のみを作りわが心の才覺とば錬り得ざるへし。かかる窮屈を心よしとせざる學者たちの人は「ただおのが感じたる事のみをよめ、さなくては眞の歌は出來がたし。」といへり。さることもあらんなれど想像を錬らしめずして感動にのみ任す時は趣向ひとしほ窮屈になりて、稽古を十分にしがたし。しかのみならず感動を詞にうつすに、悔しきこと、怨しめきこと、腹たたしきこと等はうつし易く、嬉しさ喜ばしさ、目出たさ等はうつしがたし。まして平易なる事がらにおいてをや。かかる成行きに感動をうちまかせたらんには、歌の殺氣をのみ成長せしめ、いはゆる哀で傷み怨で怒る極度の点に至るべし。こは歌のためのみならず淑女の令徳に損あること寡からざるなり。

昔より歌の上手多かる中に祝ひの歌をよくよむ人甚すくなし。まして尋常の人においては、紫式部が誹りけんやうに「松の千年」の外はなしとよ、支那の人も亦不平の時によき詩を得といへり。

西洋の歌には、悲嘆哀痛のもの多からぬにはあらされど悲むべきを善く悲み、喜ぶべきを善く喜び、又何事もなき水の流れ、鳥の聲等を意外におもしろく活動せしむることを和漢の人に（一般にいへば）立ち勝りたるがごとし。これ誠に目をつくべき所なり。もと狹き感動にのみよらば、あるひは女子に似げなき慷慨の歌、父母に見せにくき戀の歌などにのみ傾きて、あたら才覺の過半を「よるの錦」になすべきなり。

上にのべたる二つの仕方はおのおの一方に片よりて互に缺けたるところあり。題は廣かるべし、感情はつよかるべし。細に考ふれば、人人日日見聞くところの物に面白し、愛らしなど思ふこと日に幾度なるを知らず。庭の草木四時折折の景は勿論、雲のかたち、木のかげ、蟻の行列、雀の水あびなどいづれか題とならざらん。唯の題にては取り合せの物に苦しめども、目の前の物にはその煩ひなく、取り合せの無理も出來ず、形容の不都合も寡し。まして野邊にあそび公園に散歩せば題の撰びに暇あらざるべし。

かく限りなき題のまん中にありながら、古本の中に題を求め常ならざる感情を

待てむなしく机の上に肘をいたむべからず。

このほか題となるべきもの猶おほし。その一二をいはば、一は面白き繪を見てよむなり。山の彼方を思ひやり、谷川の聲を推察などして、畫工の心を汲み、繪の及ばぬところを顯すは美術の上にてよき稽古なるべし。昔より物語繪、歌繪などをもてあそぶことも往往あり、支那にて畫の登用試驗に詩を以て題とすることとあり近ごろ日本の畫工にも詩を題として弟子を敎へし人もあり。これ皆同じ關係あることなり。又漢學、洋學を心得たらん人は詩、洋歌などを反譯するもよろし。これはややむつかしくもあり、原歌の直譯となり易きものなれば甚しく好むべきにはあらざれど、名人の趣向だてを學ぶため、又は一つ事をいろいろに云ひまわす稽古になるべし。

右の仕方はいづれも空しき題にあらざるがゆゑ、取り合せ宜しくなり、切り張りの障子に似る跡かたなくなるべし。景に向ひ、繪に向ひてよむことは一通りさのみ難くもあらざれば、その例は今にわかに申さずもありなん。ここに反譯の例を一つ二つあげて第一回の草稿を終へん。詩を歌に譯するは昔よりある

もとにて、詩の題を句題と申すなり。大江千里が

「月見れば千千に物こそかなしけれわが身一つの秋にはあらねど。」

といへるは白楽天の「燕子樓中明月の夜秋來ただ一人のために長し。」といへるを題としたるなりとぞ。こは「一人のために長し。」とあるを「身一つの秋にはあらねど」と反對よりいひまはしたるなり。もし「わが身一つの秋かとぞおもふ。」などとせば全くの直譯となるべし。

○記者も一つ二つ試みんに「昔時の人すでに沒して今日水なほ寒し。」の心をよまば

その人は影もとどめぬ山川の音にのみこそ猶きこえけれ。

又「秋槐葉落つ空宮のうち、凝碧池頭に管絃を奏す。」の心をとりて

久かたの桂もかはる秋風に昔ながらの笛竹の聲。

又「羌笛何ぞ楊柳を怨むを須ひん、春光は度らず玉門關。」（楊柳は曲の名なり、あれを梅が枝の曲に替へ、奥州の故事を用ひて）

わが國の梅が枝るにぞ九重の春は勿來の關も越えしぞ。

など出たらめのうるささを許し給へ。まて句題は常の五字六字の題と用ひがたき處に用ひて便利なることあり。あるひは若き人が老人の心をのべ、子なき人が、子もちの心をのべて見るなどのかてつけには折折便利なることもあり、とにかく練習には大なる助けあるものといふべし。

西洋の歌の反譯はこの欄に美妙齋の一篇あり、その原文をばあげざれども体裁の片はしを見るに足るべし。

迷の淵（原詩は「カムプベル」の「アリンス、ダーター」）

美妙齋主人補譯

第一

誠を照らす月ながら
迷の雲に消押されて
空も暗なり、胸も闇。
迭互に手をばトり鞆や、
離れがたなの刃を渡る
身なりとだにもシフ路に
墜る涙の雨しげみ、
風さへ太く吹添ひば、

岸拍つ波も且吼えて、
「淋きなど、は忌はしや。
心盡の甲斐ありて
黒白さへだに分かぬ迄
忍ぶに便いと宜しや。
頷肯ふも口の裡。

第二

笘屋の門を打叩き、
とく／＼舩を出してよ。
白銀あまた取らせん」と
「怪し、御身は何者ぞ。
此處渡らんと宣ふか」。
我は「あるば」の島の主、
一昨日なりし此姫と

雲の氣色も濃き、薄き。
濃きは二人の妹背中。
此處にきりしま、花あやめ、
夜も暗ければ暗き身を
さらば渡らん。」とばかりに
はや河邊迄來りけり。
「やよ渡守、わたしもり、
あや猶豫はで渡もり、
言へば裡より人の聲、
か、る夜をさへ厭はずに
「然なり怪きものならず。
是は「ありん」の姫の君、
共に逃れて出でしま、

息つきあへず走來つゝ、
死ぬる此身は厭はねど、
然歎思へば……渡もり、

第三

口説く内にもはふり來る
心の鐵も鎔かしけん、
「そは便無くぞ在すらん、
とは申すとて白銀の
たゞ麗きすめぎみの
猶豫せば事をあやまらん。
小可斯くと候へば、
いざや。」と乎り夕千鳥、
船は三途の川わたり。
路知らぬ身の是非もなき、

覺められなば殺されん、
跡に殘らん此君の
されば願ふは……渡守。

なみだの雨はふな人が
聞くと齊しく立上り、
さらば小身參らんづ。
光を愛でし故ならず。
御爲思ふばかりなり。
たとひ浪風暴くとも、
かならず渡し參らせん。
打連立ちて乘移る
冥途の岸に着くものと
弘誓と見るも哀なり。

（以下次号）

論説

この欄に載する所は必しも本社の定説にあらず

紫式部和泉式部、赤染衛門以下の如き所謂名媛誘なるものを賛成導するの意に出づるか、余は未本誌を賛する能はざるなり。蓋文藝に名あるの婦人はわが國の歴史上に於て屢見るところなれどもその徳行に到りては甚疑ふべきもの多し。偶その徳行の稱道すべきものあれば率所謂烈女なるものにして、その行爲或は危激に渉るの嫌なき能はず。余の見るところによればわが國の歴史上に於て婦人の龜鑑とすべきものはただ豊太閤の夫人北廳あるのみ。余の女子教育に期するところは紫式部の輩を賛成するにあらずして北廳の流を賛成するにあり。知らず本論發行の意果して如何

明治二十年入梅日　　杉浦重剛

如何にして女子の地位を高むべきか

井上十吉

今余はかくの如き表題を掲げ來りて一言せんとするに先立ちて現在女子の地位如何を述ぶへき筈なれとも、當局のわが姉妹及び姉妹の爲に盡力せらるる

諸君の前に饒舌を費すことを要せざるなり。兎も角も姉妹の爲に盡力せらる諸君の胸裏には女子の地位を高むるはわが社會改進の關の門なるとは瞭然なるべし。されども如何にしてこの關門を開くべきかは今尚困難なる問題に屬す。徐徐にその事業を始めんとするものは一方よりは急進改良黨より攻擊を受け、一方よりは甚冷淡なる守舊黨より批判を受く。急進黨は謂へらく一時にわが國の女子に與ふるに歐洲女子と同樣なる敎育と才藝とを以てせばわが目的を達するに於て何かあらんと。かかる改良論者は自西洋の社會と東洋の社會との區別をなさざる甚だしき誤謬に陷りたるを知らず、守舊の冷淡なるは近世文明の性質を知らざると是迄の仕來に滿足して豹變するを欲せざるの氣性より起るなり。一方にては急劇に改良せんといひ、一方にては後生大事と舊慣を墨守するときは遂にはその間に軋轢生じて由由敷事となるべし。余はこれを恐るるの餘り女子の地位を高むるに於て至極必要にして且最正當の方法と思考する處のものを陳述せんとす。

わが邦の女子には三從の敎なるものありて「老いては子に從ふ」との文言あ

り、又子の母に盡すべき務を、孝道の最大なるものとなしたり。故に母は子に從はんとすれば子も亦母に順ならんとし、互に義務を盡すに於て負けまじとの心より互の間に愛情の競爭起るに至る。わが邦にて母子の間の諧和せることの申分なきは西洋の國民もその美風を學びて可なり。女子にして一分も已の義務を減ずることなくしてかくの如く已の子に愛せられ、已の子に敬せらるることを得るものならばこの主義を男女相交るの上にまで擴むること能はざるか。孝女なるものは幼時よりその母を愛し、その母を敬ひ、又その母に順なるべきことを敎へられたるものなり。幼時よりの敎にしてこれ程までに好結果を得るものならば何故にあらゆる他の場合に於ても斯の如くなる能はざるか。かくの如くなる能はざるの根本は全く敎育の上に在ることは疑ふべからざるなり。

支那の古説は人に敎ふるに女子を賤むるを以てしたるものといふべし、たとへば「女子と小人とは養ひ難し」といひ、又男子にして男子の行なきときはこれを女子に比するに至る。今西洋新主義の東漸にも關らず未女子を愛敬することを男子の務の一と認むるものなし。西洋文明の先輸入したるものはのそ形

似にして、その精神に至りては未輸入せるに至らず。世人は唯其新奇なるに眩惑され、新主義とさへいへばその良否を考へず遽これを信ずる如く、唯その皮相を生呑し、最近の說のみを采りてその源委を求ず。西洋人の今日あるは數百年の素ありて然ることを知るもの尠し。かくて今日行はるる改良說は深く思慮を費すことなきより自穩當と失する弊尠からず。凡物事生知より危險なるはなく急劇に事を爲さんとするより過ち易きはなし。今日は不幸にして異常人を驚かすの說を吐きて相競ふのこと一般の風尙となり、甚だしきは男子さへ未僅僅の政權を得るに過ぎざるの時、否、未一の政權をも得ざるの時に於て女子に政權を得せしめんと奔狂するもののあるに至れり。殊に憫むべきは世の男女同權說の主張者と自稱する論客にして、西洋にての女子の實際の有樣と知らざる未となり。論者は姑口を箴みて男女同權などの高談をなすを休めよ、女子が今日の如き奴婢の有樣より救ひ出されなん曉に至りてこの談をなすも未晩しとせざるなり。何となれば歐洲に於ても、同權の說は決して一般に是認せらるるものにあらざればなり。

抑西洋人が女子を愛敬するの美風あるはその由來久し。中古戰國の時に當りては人氣甚、殺伐にして孱弱なる女子は常に汚辱を受くるとなりしが一流任俠の武士ありてかゝる不幸なる女子を助くるをもて已の職分とし己の名譽となししとあり是れより自然に女子を愛敬するの、風を馴致せり。年移り星換り武士は封建制度の瓦解と共に跡絕ねて久しかれど、女子を愛敬するの風と女子を助くるの義氣は今尙存す。然れども今日これをなすの意、思に至りては常初の意思と全く異なり、今日にては、孱弱なるものより助を求めらるればいつも快くこれを諾ふの義心と女子を冷遇せざるの實意と密に連結して起るなり。女子を愛するの意思已にかくのごとし、然るに女子として男子と同權ならしめてこれと互角の爭をなさしむる時は勢ひ男子の占有したる位、地を奪はしめざるべからず、故に同權說に異論を唱ふるの論者今日歐洲に尠からず畢竟これ迄優しき心と慈愛の性を以て交りたる女子と位地の爭起るときはこれ等の情合の滅却するは自然の勢なり

（以下次號）

例言

本誌の目的は婦人の職分を全くし、令德を進め、及び地位を高むるにあり。家政の欄には一家を調理すべき方法を載せ。婦鑑には令德と嫺むべき佳話、實傳を載せ。雜錄には美術に關する事項或は交際の心得を載せて優美高尚の風を養ふべし、その他時時の要義及び評論を掲くるものなり。

名譽賛成員

杉浦重剛君　高田政久君
井上十吉君　宮川保全君
武田安之助君
上野銀子君　山川二葉君
佐方鎭子君　高田幸子君
小具貞子君　後閑菊野君
合原琴子君　音羽富士子君

毎月第二土曜發兌○一冊定價金八錢○六冊前金四十五錢○十二冊前金八十錢○府外の分は郵税申受○郵券代用御斷申上候

持主兼印刷人　新保磐次
編輯人　正木政吉

發行所　成美社
東京本郷區湯嶋天神町壹丁目五十九番地

大賣捌所　團團社支店
同神田區雉子町卅二番地